

1年1組

 朝顔と共に在る わたしたちの暮らし
 ～終わることのない朝顔の追究～


必要感をもって学ぶ子どもたち

「今、朝顔さんのためにわたしができること」を目標に、一人一人が自分で取り組むことを決めて活動していきました。みんなでたくさん話し合っただけで決めた朝顔との活動に邁進する子どもたちの姿をいくつか紹介したいと思います。

【朝顔ハウスを建設】



「先生水平器貸してほしい」と進言してきたHさん。できるだけ竹をまっすぐにして横の壁をつけていきたいという思いを伝えてくれました。竹を柱にくくりつけていく作業は、到底一人ではできません。何人もの子が竹を持ち協力して作業をしていきます。Hさんの「もうちょっと上。いや、すこし下」という声に合わせて微調整していきます。「よし！ここ！！」と丁度水平になったところで合図を送ると、Mさんが結束バンドで竹をとめ、Yさんが麻ひもを使って結んでいきます。朝顔ハウス建設当初は、みんながバラバラに動いていて柱一本立てるのにも苦勞していましたが、今ではチームワークよく、どんどん柱や壁がつくられていきます。ようやく周りの壁がついて、なんだか家のような形を成してきました。「屋根どうやったら付けられるかな…?」「床も竹で作りたいな」と朝顔ハウスを作る中で、新たな問いや願いが生まれていきます。

【ビニールハウスづくり】



「冬にも朝顔さんを咲かせたい」という子どもたちの思いから、11月末に2代目の種を植えることになりました。Mさんの「温かいところじゃないと朝顔さんは咲かせられないよ。ビニールハウスをつくって温かくしてあげたい」という願いが、ビニールハウス建設のはじまりでした。なんとなく形になってきたところで、Mさんは「エアコンの風をビニールハウスに入れたらもっと暑くなって、夏の環境が作れるかもしれない」と言って、筒状の段ボールを繋げ合わせてダクトを作り始めました。Uさんは筒に息を吹き込んだり、「あ〜」と声を出したりしながらMさんと一緒にダクトを作っていました。すると「声が漏れるということは、きっと空気もどこかから漏れているはず。全部テープで巻いて、空気が漏れないようにしよう」そう言いながら、ガムテープをぐるぐる巻いて隙間ができないようにしました。いよいよ、お手製ダクトをビニールハウスに挿入し、エアコンのスイッチを入れます。エアコンの風がダクト

を通じて、ビニールハウスの中に流れ込みます。「よっしゃ～成功！！」一緒に作っていた仲間たちは、喜びの雄叫びをあげました。それから毎日、子どもたちはビニールハウスの中の温度を測っています。朝は10度前後ですが、昼間は30度くらいまで温かくなっています。果たして、冬に朝顔は咲かせられるのでしょうか？

【朝顔の種を取る】



朝顔から生まれてくる種をせっせと採り続けている子どもたち。「朝顔さんの赤ちゃんだ～」と言いながら一つ一つ丁寧に枯れた実の中から種を採り出していきます。「毎日採り続けたらどのくらいの量がたまるのだろう？」というTさんの問いから、『朝顔の種貯金』をはじめることになりました。それから約一週間がたち、種貯金箱はついに満タンになりました。みんなでどのくらいの種が入っているか予想しました。Yさんは「1万個くらいじゃない？」Tさんは「ぼくは、1000個くらいだと思う」Nさんは「200個くらいじゃない？」などと、思い思いに自分の今ある量感で測っていく姿がありました。そして、実際に自分たちで数を数えることにしてみました。グループにそれぞれ種を配り、協力して数えた後にみんなの数を足していく作戦でいくことにしました。1こずつ「1、2、3、4・・・」と数えていくNさん。途中で「あれ？いくつだっけ？わかんなくなっちゃった。もう一回最初から数えよう。1、2、3・・・」その姿を見たSさんは、「私は5このまとまりを作って、5、10、15、20・・・100」って数えてるよ。まとまりを作ってやってみようよ」とアドバイスをすると、Nさんは「すごいね！それなら、10このまとまりをつかってそれが10こ集まれば100こになるって方法もいいよね」とSさんの数え方から、新たな数の数え方を発見していったのです。この考え方を全体で共有すると、たちまち10ずつまとめて数える方法が浸透し、数える速さが一気に速くなっていきました。そうして、クラスみんなで協力して数えた結果、朝顔の種貯金の数は『11262個』であることが分かりました。この数字を見た子どもたち

は、「1万ってこんなにあるんだね」と身をもって数理を確かなものにしていったのです。

1年生の算数の教科書には、「大きいかず」という学習が掲載されています。ここでは100までの数を学習します。2年生では、「100をこえる数」で1000までの数を、3年生では「1万をこえる数」で100のまとまり、1000のまとまりを学習します。種の数を実数えた子どもたちは、1年生の段階で3年生までの算数の学習を考えていることとなります。知りたい、分かりたいという必要感からくる学びには、大きな可能性があると子どもたちの姿から感じるのです。

Gさんが、私にこんなことを話してくれました。「先生、朝顔さんを育てたから、ぼくたちは朝顔さんのおかげでたくさんのお陰でたくさんのお陰で朝顔さんのことを学べるね」朝顔とのくらしがあるからこそ、子どもたちは必要感をもって学びに向かっているのだと、Gさんの言葉からも感じます。最後まで、朝顔とのくらしを大切に学び続けていきたいと思いました。

